る七百ターラー程の年収を得ていたようだ。しかし大都市は物価も高く、生活は思った程楽ではなかった。常により良い条件の職場を捜していたが、その望みは結局かなえられる事なく、千七ターラーの遺産を残して世を去った。死因は脳卒中。晩年はほぼ失明の状態にあり、最後の作品である「フーガの技法」が未完のまま残されているのもこのためである。

それこそ千曲以上あるバッハの作品の中で一番の醍醐味は、「マタイ受難曲」などに代表される、歌のソロと混声合唱とオーケストラの合奏による一連の合唱曲であろう。単に聞き流しているだけでも圧倒されるが、事前に多少なりとも聖書を読んだり辞書などで歌詞の意味を把握してから観賞すると、ひとつひとつの言葉の重さや、そこに託された感情の深さがどのように音楽に変換されているかが良くわかり、感動を呼び起こされずにはいられない。

パイプオルガンの作品も「枚挙に暇なし」だが、その他にもヴァイオリン一梃で演奏される「シャコンヌ」や、ピアノまたはチェンバロで演奏される「ゴールドベルク変奏曲」などは、バッハの芸術の頂点を極めているものである。

ベートーヴェン

ルードヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（一七七〇～一八二七）が亡くなってからちょうど百六十年目に当る一九八七年の春――彼の命日は三月二十六日である――ウィーンの出版社（ヴィルヘルム・マウトリッヒ社）よりベートーヴェンの病跡について新しい本が出版された。ベートーヴェンの病跡については古くから数々の研究成果が発表されてきたが、資料不足、医学知識の不足、また多くの興味本意な憶測の影響など

から、その内容に満足のいくものは少なかった。

今回ウィーンの病理学者ハンス・バンクルと内科医のハンス・イエッセラーが共同でまとめた研究成果は、つい最近まで存在そのものが全く知られていなかったベートーヴェンの頭蓋骨の一部を資料に含めた、非常に興味深いものである。普通このような研究は専門学会で発表されるのみで一般大衆の手には届かない事が多かったが、本書は誰にでも買える上、多数くのカラー写真も掲載されている。

パトグラフィー――病跡学に必要なものは、まず資料である。資料は多ければ多い程良い。この本で使用されたものは　①ベートーヴェンが生存していた頃の手紙などをはじめとする文書。ベートーヴェン自身の手によるものはもちろんのこと友人、知人の手紙、ベートーヴェンの主治医達の処方箋その他　②ベートーヴェンの死亡翌日に行なわれた病理解剖の所見　③一八六三年と一八八八年にウィーン楽友協会が行なった遺体発掘の際の遺骨調査報告書並びに頭蓋骨の写真と石膏模型　④一八一二年に制作されたライヴマスクをはじめとするベートーヴェンの肖像多数　⑤一九八五年に再発見されたベートーヴェンの頭蓋骨の小片三個その他である。

①の手紙類や、晩年全聾になってから使用された会話帖は、ベートーヴェンの生活態度を浮き彫りにして面白い。たとえば患者としてのベートーヴェンは全くの落第生だった。一時間ごとに小匙一杯ずつ服用するように、と処方された水薬は大匙一杯ずつ飲んでしまう結果、かえって気分が悪くなる。仕方がないので水をがぶ飲みして薬の効き目を薄めてしまおうと試みる。食事療法などは三日と守れなかったようである。またベートーヴェンは酒が好きで、病状にかかわらず飲酒を許してくれる医者が彼にとっては名医であった。

②には解剖によって明らかになった内臓の状態が詳しく記述されている。しかし確認された病変の原因と

考えられる病名には、全く触れられていない。

③の発掘は本来ベートーヴェンの病跡を確認するために行なわれたものではなく、ウィーンのヴェーリンガー墓地（現シューベルト公園）に埋葬されていた二人の楽聖――ベートーヴェンとシューベルト――の墓を新しくするためのものであった。第一回目はベートーヴェン没後三十六年たった一八六三年十月十三日に行なわれ、遺骨が土葬によってすでに朽ち果てていた木製棺より金属製の棺に移し替えられた。その際の遺骨調査の記録と写真その他は今日まで残っている。この時に頭蓋骨の調査計測を受け持ったフランツ・ロメオ・ゼーリッヒマン（一八〇八～一八九二）が⑤の骨片を入手した模様である。

第二回目の発掘は第一回の発掘より二十五年後の一八八八年に行なわれ、ベートーヴェンの墓そのものがヴェーリンガー墓地より中央墓地に移された。この際にも棺は開けられたが、時間的制約があったため学術的調査は頭蓋骨の所見および計測のみに終わった。

⑤の骨片は全部で三個である。ひとつは後頭骨の一部、残りのふたつは一辺でつながり左の頭頂骨の一部を形成する。これらは前述のゼーリッヒマン（ゼーリックマン？）より息子のアルベルト（一八六二～一九四五）に受け継がれ、遺品の中から最近発見されたものである。発掘当時の調査報告書や頭蓋骨の石膏模型などと照合した結果、この骨片がベートーヴェンのものである事はほぼ確実である。

閑話休題、実際ベートーヴェンはどのような健康状態にあったのだろうか。まずは彼の外見から追ってみよう。

少年の頃からベートーヴェンは体格が良かった。十五才当時は『広い肩幅と大きな頭、丸鼻で首は短く色黒、姿勢は前かがみでエスパニョール（スペイン人）という仇名であった』という。

青年ベートーヴェンも骨太で筋肉質、強情そうでメトセラ（旧約聖書に出てくる九百六十九年生きたというユダヤの族長）ほども長生きしそうな感じだったらしい。興味深いのはこの時点で初めて顔のあばたにつ

いての記述が出てくることである。正確な時期は不明だが、ベートーヴェンは天然痘に疾患したと思われる。

四十才以降の壮年ベートーヴェンも基本的印象は同様である。小柄（身長百六十八センチで筋骨たくましく、色黒、あばた面で見るも不快な感じ、そして立派な（大きな）頭に黒くて量の多いぼさぼさの長髪を後ろに流していた。四十才当時は三十才と偽ってもおかしくない程若く見えたそうである。晩年は白髪になった。不精髭もしょっちゅうで、結構長くのばしていたらしい。

大きな鼻は幅広く、鼻の穴もそれ相応に大きかった。鼻くそほじり、鼻毛抜きは頻繁だったようだ。ひたいは広く高い。

目はそれ程大きくなく、笑うと顔の中に埋没してしまいそうであった。楽譜を読む際などには時々眼鏡も使った。遺品の眼鏡には近視用のレンズが入っている。目の表情は豊かで、何かアイデアを思いついたような時には突如として見開かれ、くるくると回転するか上をじっと見上げるか前方を凝視する、などの変化が起こり、それと共に小柄な身体も急に大きくなるような印象を与えたらしい。この突然の変化は散歩中であろうと会話中であろうとどこでもお構いなしに起こったため、しばしば回りの人々の注目を集めたそうである。

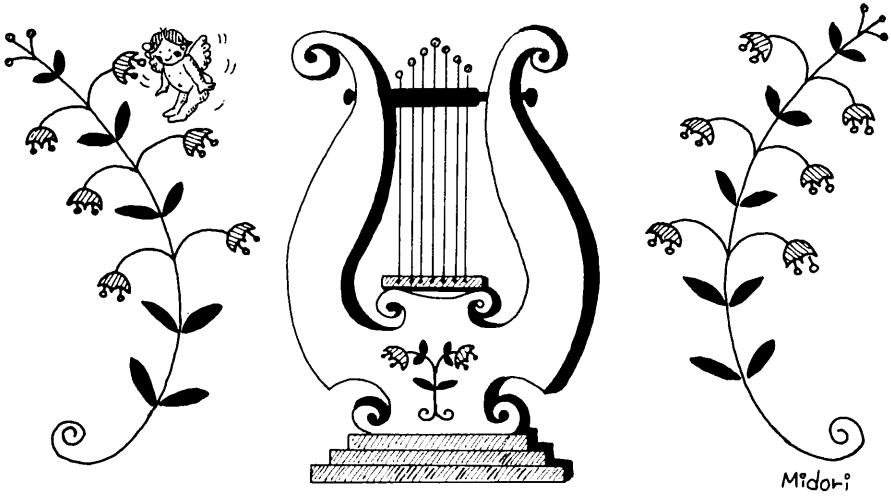
唇は良い形であった。若い時には下唇が前方に出ていたらしいが、頭蓋骨を観察した限りでは上の前歯がかなり出っ歯である。あごの中央と両脇には縦のすじが刻まれていた。

手は大きく毛深く、指も太かった。身体全体の動きは不器用で、しばしば物を取り落としたり割ったりしたという。

ベートーヴェンは生涯一度も結婚しておらず、日々の食事は家政婦に作らせるか外食するかであった。晩年のベートーヴェン宅で食事をしたヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ベーム（一七九五〜一八七六）の文を見てみよう。一八二四年に書かれたものである。

『…ベートーヴェン宅の食事は非常にまずい。とても口に入らないような物も少なくなかった。スープは水の如く、肉は固く油は臭い。しかしただでさえ興奮しやすいベートーヴェンにこの事を悟られてはならなかった。私が招待された折りには卵が食卓に出された。ひとつめを割ってみるとひどく悪臭がするので、それをそっと皿の隅へ押しやった。ベートーヴェンはこれに気づき、私の皿を横目でにらみながらムスッと一言も喋らなくなってしまったが、彼自身も自分の卵を割ってみたところ、同じような腐乱臭がたちのぼった。ベートーヴェンはその卵をつかむやいなや窓から外の道に向かって投げ捨てた。ふたつめの卵も同じ運命であった。窓から放り投げられる卵が通行人に当って警察沙汰にでもならなければ良いが、と、人ごとながら心配になってしまった…』

ベートーヴェンは朝食にコーヒーを好んで飲んだ。一杯につきコーヒー豆は六十粒と決めていたらしく、客の前で豆を数える事もあったという。マカロニにパルメザンチーズをかけたもの、ツァンダー（ホタルジャコという白身の魚）とじゃが芋、鹿、野鳥、猪などの野生動物料理、ポタージュ状のパンスープなどはベートーヴェンの好物だった。夕食は粗末で、スープ一杯に昼食の残り



物をつまむ程度。晩年（一八二二年以降）には行きつけのレストランで毎土曜日に「ブルートヴルスト（血のソーセージ）じゃが芋添え」を注文し、レーゲンスブルクのビールを飲み、食後にパイプを一服楽しむのが習慣だった。

ベートーヴェンは酒好きでワインとビールを好んで飲んだが、ワインは高級なものよりも安いものの方が口に合ったらしい。飲み物といえば井戸水も大好きで、特に暑い夏の盛りには冷たい地下水をがぶがぶ飲んでいた。

ベートーヴェンのパトグラフィーの中で必ず話題になるのは、彼が全聾に至るまでの経過と原因、直接の死因であった肝臓疾患、生涯悩まされた消化器官系疾患、およびそれらと梅毒との関係である。これらの観点についてこのたび新しく発表された見解を簡単にまとめてみよう。

まず梅毒説についてだが、結果から先に述べると、ベートーヴェンは梅毒ではなかった模様である。

ベートーヴェンが先天性梅毒であった、と仮定するには、まず彼の両親に梅毒の兆候が認められなければならないが、全く見当らない。その上ルードヴィヒの後に生まれた五人の子供のうち、幼時に亡くなった三人以外はいたって健康であるし、ベートーヴェンの兄弟姉妹の中に先天性奇形児はひとりもいない。

後天性梅毒と考えるのも無理がある。当時ほぼ唯一の治療手段であった水銀軟膏の処方箋も見当らないし、第一彼の既往症や病状を克明に聞いたり書いたりしている主治医が梅毒には何もふれていない。ベートーヴェンの梅毒を秘密にする事によって、医者としての技量を「梅毒の診断さえできなかった」と評価される危険を犯してまでも彼に義理立てしなければならない理由は、どの医者も持ち合わせていなかった筈である。

聴覚に関する疾患とその診断法、治療法は当時まだ未発達の分野だった。従って当時の医者が残した記述

も曖昧なものが多く、ベートーヴェンの難聴の全体像を的確に把握するのは容易ではない。「死の直前まで作曲を行なっていた」ということは、頭脳では音色やハーモニーを想像できたわけで、ベートーヴェンの難聴が脳の聴覚中枢に起因するものではなく、耳の伝音・感音部の疾患によるものであることを示している。

二十代にすでにその兆候が表れ、晩年には全聾に至ったベートーヴェンの聴覚疾患が何であったか、とはしばしば議論されてきたことである。中でもベートーヴェンの遺体の解剖所見に見られる記載事項――聴神経の萎縮と頭蓋骨の肥大（通常の厚さの約二倍の十三ミリ）――をもとに推測された「ページェット病」の疑いは、ごく最近まで取り沙汰されていた。ページェット病はビールスによって起こる骨髄の炎症で、患部の骨組織が局部的に肥大するなどの症状がみられる。ベートーヴェンの側頭骨錐体（頭蓋骨の横の部分）がこの病気によって変形し、それが原因となって聴神経が圧迫され、難聴が起こったというのである。しかしこの推測は、今回の研究資料に含まれる頭蓋骨破片の所見と一致しない上、二十七才で左耳が聞こえにくくなり五十六才で両耳とも聞こえなくなった、という長期に渡る経過を考えると、ベートーヴェンの場合に該当するとは言い難い。

この本でベートーヴェンの症状に照合して推定されている病名は「内耳性タイプの耳硬化症」、つまり耳硬化症を起因とする感音難聴（内耳性難聴）である。

この病気は遺伝的要因も含んだ、今日でも治療困難なものだが、その特徴である　①多くの場合、両耳に疾患が現れる　②まず高音が聞こえなくなる。子音が聞き辛くなるため会話の聞き違えが増える。特に低周波の雑音の中（町の雑踏など）では一層音が聞き取りにくくなる　③耳鳴りがある　④初期症状で大きな音に対しての過敏反応が見られる　⑤病状の進行は一般にゆっくりであり、途中に病状の停滞も起こり得る　⑥内耳の圧迫感や側頭部の頭痛（片頭痛）があり、寒いとその苦痛が増加する――などとベートーヴェンの

やがて夏になってから二ヵ月間黄疸が出た。その後下痢があり、全快まで七〜八ヵ月かかっている。ウィルス性肝炎の経過としてはかなり遅いほうだが、リュウマチや神経痛と間違えられやすい関節痛や四肢痛の前駆症状から始まって、不快感や無力感、食欲不振、そして黄疸。この黄疸は経過が良好の時でも二〜三週間はかかるものである。運悪く膵臓炎を併発すると消化不良、下痢を起こすなど、ベートーヴェンの症状はウィルス性肝炎と酷似している。

ふだんの食生活で肝臓に負担のかかりやすい食物をとり過ぎても、肝硬変になる危険度は増すだろう。ベートーヴェンがほぼ生涯にわたって苦しんだ消化不良と下痢とは、彼の食べ物の嗜好をも多少は暗示している。食生活とアルコールとで肝臓への負担が高まっていたところへのウィルス性肝炎が、肝硬変の引き金となったようである。この肝炎疾患後四年の時点でベートーヴェンは吐血しているが、これは肝硬変を原因とする食道静脈瘤の破裂と考えられる。

解剖の所見には前述の肝臓の変化以外に脾臓の肥大（脾腫）や膵臓の硬変と膵管の膨張なども記載されているが、みな肝硬変と密接な関係にある症状である。

最後にベートーヴェンの三十年来の持病であった慢性の下痢についても触れておこう。

この下痢が正確にいつから始まったかは不明であるが、文書として残っている愁訴は一七八七年に母親が死亡して以来である。下痢は疝痛を伴い、一七九五年以降は発熱もみられた。病状は不安定で食欲不振のあと消化不良を起こし、げっぷや吐き気と共に便秘と下痢とが交互に起こる。これに並行して痔疾もあったようだ。

不思議なのは、これだけの症状を何回となく繰り返しながらも、身体全体の衰弱がほとんど認められないことである。ベートーヴェンは生まれつきがっしりとした体格であったし、長時間の散歩などからもその健

康さがうかがえる。もちろんこの下痢によって一時的な衰弱はあったにしても必ず回復し、その後もとりたてて体力の低下はなかったようだ。ということは、ベートーヴェンの消化不良は大腸の問題であって栄養分の吸収機能そのものには異常がなく、「吸収不良症候群」の疑いは除外できるだろう。

今までベートーヴェンの慢性消化不良は「潰瘍性大腸炎」または「限局性腸炎（クローン病）」であろうと言われていた。しかしこの病気は、患部に潰瘍の跡など目で見える病変が認められるのが普通であり、解剖所見でこのような変化について何も記載されていないのも不自然である。

大腸の機能は精神状態に非常に左右されやすく、精神的な原因で便秘になったり下痢が数週間続くのは決して珍しい事ではない。この「心身症としての大腸炎」つまり「過敏大腸炎」では、腸に外見上の変化が見られない上に次の症状がある。 ①苦痛がかなり大きく医者を呼ばずにはいられない。 ②愁訴の中心は「痛み」であり、下痢と便秘が交互に起こる。 ③食べ物を受けつけない事もある。 ④診断が難しく、病名がはっきりするまでに数年かかることが珍しくない。 ⑤症状の重さと患者の客観的印象に矛盾がある。 ⑥患者はふだんストレスに晒されている。――ベートーヴェンの訴えた「疝痛」「下痢と便秘」「食欲不振と不快感」など当っているではないか。

過敏大腸症になるきっかけとしては ①片親の死亡 ②不幸な家庭環境 ③ストレスや周囲の過大な期待感や、成功しなければ、という義務感 ④違った環境への引っ越し その他さまざまな精神的因子が挙げられる。その人間が何らかの助けを求めるサインのような事もあれば、愛情に餓えている時にもなりやすいという。いずれにせよ無意識のうちに精神的荷重を肉体的反応によって昇華させているのだが、ベートーヴェンは果たして何を求めていたのだろう…。

愁訴が一致する。この感音難聴に老人性難聴、血行障害、伝染性疾患、たび重なる耳管カタルなどの影響が加わって、晩年の全聾状態が形成されたと考えられる。

次は肝臓疾患についてでだが、ベートーヴェンの肝臓がすでに肝硬変の状態にあり、萎縮も始まっていた事は遺体解剖で確認されている。死亡直前の状態は典型的な肝性昏睡を示しており、ベートーヴェンが肝硬変で死亡したのは決定的である。しかし肝硬変は急性の疾患ではなく、その土壌ができてから肝硬変になるまでに普通数ヵ月から数年はかかる。ベートーヴェンの肝臓は弱っていたのだろうか。

一般に肝硬変になる原因の代表的なものはアルコールだ。ベートーヴェンが酒をかなり飲んだことは知られており、彼がアルコール依存症ではなかったか、との推測もよく出てくる疑問である。

個人差もあるが、六十～八十グラムの純粋アルコールを十五～二十年間毎日摂取すると肝硬変になるという。実際の飲み物ではビールなら二リットル、ワイン〇・七リットル、デザートワイン〇・五リットル、蒸留酒〇・二リットルのいずれかを毎日飲む事になる。ベートーヴェンはこの内のビール、ワインおよびデザートワインを好んで飲んだ上にその量は年々増加しており、肝硬変の危険ラインすれすれまで飲酒していた事は確かである。しかし酒量と生活態度には何の関連も見られないし、第一死ぬ数ヵ月前まで作曲という高度な精神的創造作業に携わっていた、という事実からも、ベートーヴェンがアルコール依存症であったという推測は否定されなければならない。

ベートーヴェンが一八二一年に疾患したとみられるウィルス性肝炎（亜急性肝炎）は、肝硬変のもうひとつのきっかけになっているようである。

ベートーヴェンはこの年の五月頃「重症のリュウマチ性疾患」にかかっている。これは長い間回復せず、